

短期大学リハビリテーション学分野における 学籍異動の要因

FACTORS OF ACADEMIC REGISTRATION TRANSFER IN THE REHABILITATION DEPARTMENT OF A JUNIOR COLLEGE

遠藤 康裕 ・ 三浦 雅史 ・ 佐々木 広人 ・ 坂上 尚穂
ENDO Yasuhiro, MIURA Masashi, SASAKI Hiroto, SAKAGAMI Hisao

キーワード：退学，欠席率，入試区分

Key words：drop out, absentee rate, examination categories

要 旨

- 【目的】本研究では短期大学リハビリテーション学科における学籍異動者の入試時および入学後1年次の成績，教務データを分析し，学籍異動の要因を明らかにすることとした。
- 【方法】対象は2017年度から2019年度に短期大学1校のリハビリテーション学科に入学した325名とした。全対象者および入試区分ごとに退学率，学籍異動率を算出した。また，退学群と対照群，学籍異動群と対照群の間で高校評定平均，高校欠席日数，入試面接点数，短大入学後1年次の欠席率，短大1年次のGPA（Grade Point Average）を群間比較した。
- 【結果】学籍異動者は61名（18.8%），退学者は39名（12.0%）であった。入試区分別の退学率はAO入試，公募推薦入試で高かった。退学群，学籍異動群では高校欠席日数，1年次欠席率が大きく，1年次GPAが低かった。
- 【考察】高校時の欠席日数が多い学生は入学後の欠席率も高くなり，その結果学修時間・効果が不十分となり，学業成績（GPA）が低くなる可能性が考えられる。その結果，留年もしくは退学となる学生が多くなるのではないかと考えた。

Abstract

【Introduction】 The purpose of this study is to analyze the data of entrance examination and first grade of university for rehabilitation department of junior college, and to clarify the factor of academic registration transfer.

【Methods】 From 2017 to 2019, 325 students entered a survey of one junior college rehabilitation department were examined. Dropout rate and transfer rate of school registrations were calculated for entrance examination categories. In addition, the following items were compared between the dropout group and the control group, and the school transfer group and the control group: high school grade point average, number of days absent from high school, interview score at the time of entrance examination, absentee rate in the first year of junior college, first year of junior college GPA (Grade Point Average).

【Results】 There were 61 (18.8%) transferees and 39 (12.0%) dropouts. The dropout rate for each entrance examination category was high for the AO entrance examination and the open recruitment recommendation entrance examination. In the dropout group and the transfer group, the number of days absent from high school and the absentee rate in the first year of university were significantly higher and the GPA in the first year was lower than in the control group.

【Discussion】 Students who are absent from high school for a long time also have a high absentee rate after entering university, which may result in insufficient study time and effectiveness, resulting in a low GPA. It was considered that those students might repeat a year or drop out.

【はじめに】

文部科学省の報道発表によると、我が国における2012年度の高教育機関の中途退学者の総数は調査対象の全学生数2,991,573人中2.65%の79,311人にのぼり、2007年度比では0.24ポイント増となっている [1]。同調査において、退学の主たる理由は経済的理由にあるとされている [1]。しかし、実際の理由としては、学習意欲の喪失、人間関係、関心の移行と、学業に直結するものも挙げられている [2]。大学不適應や不本意入学も問題と考えられている [3-5]。

2014年の調査では、保健医療系統学部の年度内の退学率は2.0%と国公立私立大学全体の1.8%より高い。卒業までの退学率も全体が8.1%であるのに対し、私立大の保健医療系統学部では8.9%

と高い水準になっている [6]。退学防止対策においては、欠席の増加や成績の低下などの退学要因をできるだけ早期に把握する必要があると考えられ、本学リハビリテーション学科(以下本学科)でも退学率の減少を重点目標とし、取り組みを行っているが、顕著な減少に至らず、学科の取り組みが功を奏していないことが悩みの種である。その一つの問題点が本学科における退学に至る要因が明らかでないことと考える。そこで、本研究では本学科における学籍異動者の入試時および入学後1年次の成績、教務データを分析し、学籍異動の要因を明らかにすることとした。

【対象および方法】

対象は2017年度から2019年度に短期大学1校のリハビリテーション学科理学療法専攻および作

業療法学専攻に入学した全学生325名とした。

抽出データは退学の有無、休学および留年の有無、短大入学時の入試区分および面接の点数、高校評定平均、高校欠席日数、短大1年次の欠席率、1年次のGPAとした。また、退学率、退学・休学・留年を合わせた学籍異動率を算出した。高校評定は5段階評価であり、高校欠席日数は実数、短大1年次の欠席率は履修科目総コマ数に対する欠席コマ数の割合とした。各データは学生情報の使用申請書を提出の上、入試管理部門、教務管理部門より入手し、研究責任者以外は閲覧することができない学内サーバー上のデータフォルダ内にて管理のもと使用した。

分析は2020年11月に行なった。統計学的解析として、全対象者および入試区分ごとに退学者数・退学率、学籍異動者数・学籍異動率を算出した。また、退学者を退学群、退学者に休学、留年した学生を加えた学籍異動群、それ以外の者を対照群とし、退学群と対照群、学籍異動群と対照群の間で高校評定平均、高校欠席日数、入試面接点数、

短大入学後1年次の欠席率、短大1年次のGPAをMann-WhitneyのU検定を用いて群間比較した。さらに、高校欠席日数と短大1年次欠席率、1年次GPA間の相関をSpearmanの順位相関係数を用いて検討した。統計学的解析は統計解析ソフトIBM SPSS Statistics 27 (IBM社)を使用し、有意水準は5%とした。

【結果】

2020年11月時点での学籍異動者は61名(18.8%)、退学者は39名(12.0%)であった(表1)。

入試区分別の退学者数、退学率、学籍異動者数、学籍異動率を表1に示した。入試区分別の退学率はAO入試が最も高く、次いで公募推薦、社会人推薦となった(図1)。年度毎の退学率では、2017年、2019年はAO入試が高く、2018年は公募推薦が最も高い(図2)。学籍異動率はAO入試が最も高く、次いで一般入試、公募推薦となっていた(図1)。年度毎でみると、学籍異動率は、2017年度はセンター利用での入学者で割合が高

表1

| | | A0 | 一般 | 公募推薦 | 指定校 | 社会人 | センター | 計 |
|-----------|-----------|------|------|------|------|------|------|------|
| 全対象者 | 入学者数 | 125 | 20 | 92 | 47 | 10 | 31 | 325 |
| | 退学者数(人) | 19 | 1 | 13 | 3 | 1 | 2 | 39 |
| | 退学率(%) | 15.2 | 5.0 | 14.1 | 6.4 | 10.0 | 6.5 | 12.0 |
| | 学籍異動者数(人) | 29 | 4 | 18 | 4 | 1 | 5 | 61 |
| | 学籍異動率(%) | 23.2 | 20.0 | 19.6 | 8.5 | 10.0 | 16.1 | 18.8 |
| 2017年度入学者 | 入学者数 | 35 | 5 | 36 | 14 | 7 | 9 | 106 |
| | 退学者数(人) | 9 | 0 | 4 | 2 | 1 | 2 | 18 |
| | 退学率(%) | 25.7 | 0.0 | 11.1 | 14.3 | 14.3 | 22.2 | 17.0 |
| | 学籍異動者数(人) | 10 | 1 | 5 | 2 | 1 | 3 | 22 |
| | 学籍異動率(%) | 28.6 | 20.0 | 13.9 | 14.3 | 14.3 | 33.3 | 20.8 |
| 2018年度入学者 | 入学者数 | 42 | 11 | 33 | 18 | 2 | 10 | 116 |
| | 退学者数(人) | 4 | 1 | 8 | 1 | 0 | 0 | 14 |
| | 退学率(%) | 9.5 | 9.1 | 24.2 | 5.6 | 0.0 | 0.0 | 12.1 |
| | 学籍異動者数(人) | 12 | 3 | 12 | 2 | 0 | 2 | 31 |
| | 学籍異動率(%) | 28.6 | 27.3 | 36.4 | 11.1 | 0.0 | 20.0 | 26.7 |
| 2019年度入学者 | 入学者数 | 48 | 4 | 23 | 15 | 1 | 12 | 103 |
| | 退学者数(人) | 6 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 7 |
| | 退学率(%) | 12.5 | 0.0 | 4.3 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 6.8 |
| | 学籍異動者数(人) | 7 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 8 |
| | 学籍異動率(%) | 14.6 | 0.0 | 4.3 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 7.8 |

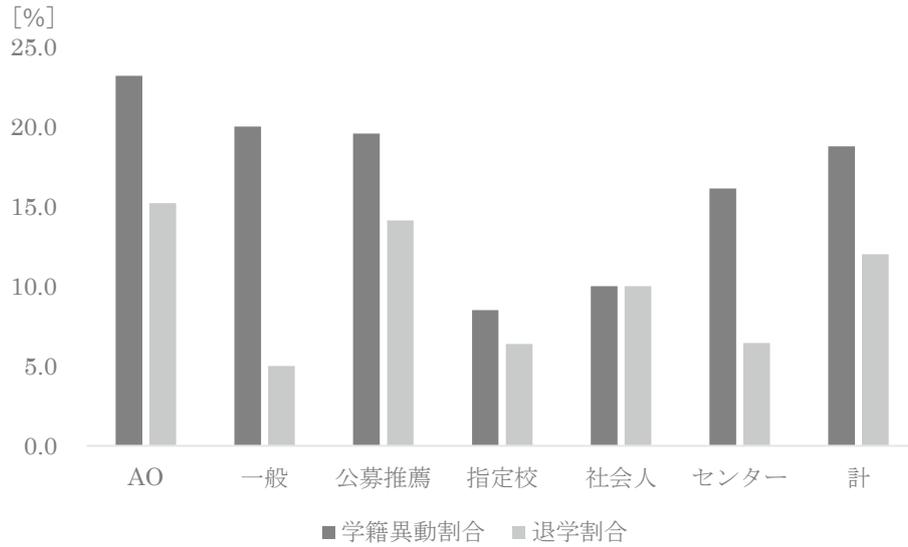


図1 全対象者における入試区分別の退学率

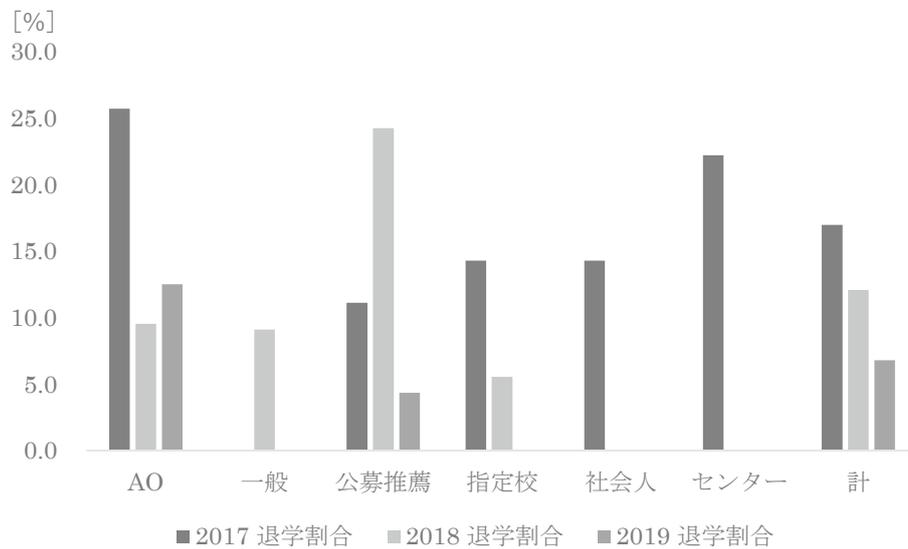


図2 年度毎の入試区分別の退学率

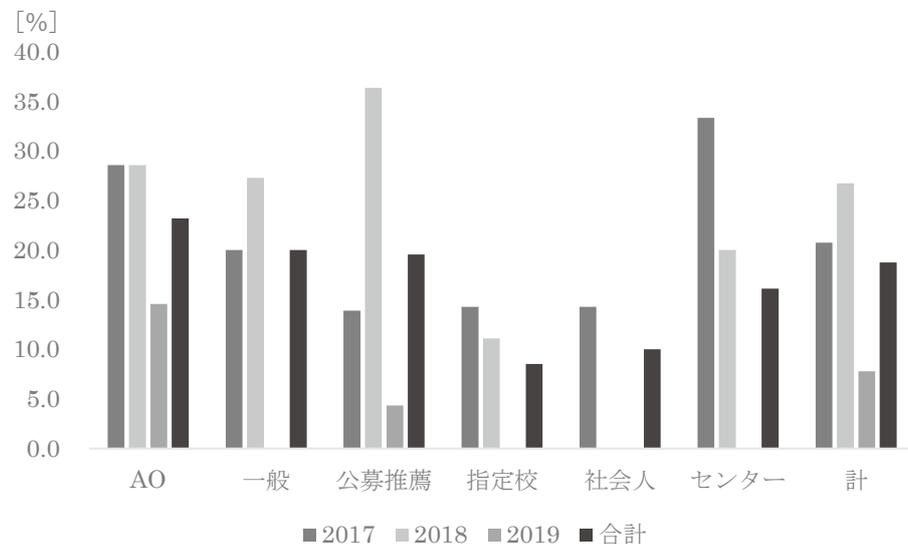


図3 年度毎の入試区分別の学籍異動率

く、次いでAO入試、一般入試がつづく。2018年度では、公募推薦、AO入試、一般入試の順に高くなった(図3)。

各群の高校評定平均、高校欠席日数、入試面接点数、短大入学後1年次の欠席率、短大1年次のGPAを表2に示した。対照群との比較では、高校在籍時の欠席日数で退学群が有意に多い結果であった。高校評定平均、面接点数は有意な差は認められなかった。学籍異動群では、高校時の欠席日数と1年時の欠席率が対照群に比べ有意に高かった。1年時の累計GPAは、退学群が有意に低い結果であった。学籍異動群でも同様に、1年時のGPAが有意に低かった。

高校欠席日数と短大1年次欠席率は有意な正の相関、短大1年次欠席率と1年次GPA間には有意な負の相関が認められた(表3)。

【考察】

2014年時点で、全国の保健医療系学部の退学率は2.0%、卒業までの退学率は私立大の保健医療

系統学部では8.9%であった[6]。これに対し、本研究の対象である本学リハビリテーション学科における退学率は12.0%とそれよりも高かった。

入試区分別の退学率では、全体ではAO入試と公募推薦入試で高かった。調査時点での年度別入学生者の状況としては、2017年入学生は3年間終了、2018年入学生は2年間終了、2019年入学生は1年間終了している。ゆえに、年度別の入試区分別退学率をみると、特に入学1年目、2年目で、AO入試、公募推薦入試での入学生の退学率が高いことが示唆される。学籍異動率でも同様に、AO入試、公募推薦入試での入学生で高い結果である。

本学のAO入試と公募推薦入試、指定校推薦入試では、個別面接と小論文、調査書が試験方法とされ、一般入試ではそれに学力試験、センター試験利用入試ではセンター試験成績が追加される。AO入試や推薦入試の大学側から見た利点として、安定して学生数を確保できることが考えられるが、反面、学力試験がない入試を受ける学生はそうでない学生と比べ、志望大学や資格への意識や学修に対する意識や経験が異なり、入学後の評

表2 各群の高校評定平均、高校欠席日数、入試面接点数、短大入学後1年次の欠席率、短大1年次のGPA

| | 対照群 | 退学群 | 学籍異動群 |
|------------|-------------|---------------|---------------|
| 高校評定平均 | 3.8 ± 0.5 | 3.7 ± 0.5 | 3.6 ± 0.5 |
| 高校欠席日数(日) | 4.8 ± 9.8 | 7.8 ± 10.0 ** | 8.6 ± 14.6 ** |
| 入試面接点数率(%) | 79.8 ± 14.3 | 76.2 ± 15.1 | 76.1 ± 14.2 |
| 1年次欠席率(%) | 1.3 ± 2.0 | 4.5 ± 7.1 | 4.3 ± 6.4 ** |
| 1年次GPA | 2.5 ± 0.5 | 2.0 ± 0.4 ** | 1.9 ± 0.4 ** |

表3 GPA、高校欠席日数、短大入学後1年次の欠席率の関連(n=324) 欠席率、短大1年次のGPA

| | 相関係数 | 有意確率 | 95%信頼区間(両側) | |
|-----------------|--------|--------|-------------|--------|
| | | | 下限 | 上限 |
| 1年次GPA - 1年次欠席率 | -0.348 | <0.001 | -0.445 | -0.243 |
| 1年次GPA - 高校欠席日数 | -0.186 | 0.001 | -0.296 | 0.072 |
| 1年次欠席率 - 高校欠席日数 | 0.361 | <0.001 | 0.258 | 0.456 |

Spearman rank correlation test にて検定

働不安に影響するともいわれている [7]. 本学科の学生においても、本学での教員経験が長い我々の主観ではあるが、退学時の理由として、学習意欲の喪失や関心の移行を背景とした進路変更を挙げる者も多い. 本学の特徴として、AO入試、公募推薦入試での入学生数が多いことも挙げられる. 幅広い学力層や様々な社会的背景を持った学生が在籍することで、その中で大学への不適応や学力不足により退学に至る学生が一定数存在するものと考えられる.

入学後の学修成績として、短大入学後の1年次GPAを比較した結果、退学群および学籍異動群ともに対照群に比べ優位に低かった. 他大学における退学者予測では、累積GPA、GPA変化量が有意な説明変数となるとされている [8], 前述した学習意欲の喪失や関心の移行の要因として、短大入学後の成績不良が大きな影響を及ぼしている可能性が考えられる.

高校在籍時の欠席日数で退学群および学籍異動群が対照群に比べ有意に多い結果であった. また、入学後1年次の欠席率でも学籍異動群は対照群よりも有意に高かった. さらに、短大1年次GPAは欠席率と有意な相関を認め、短大1年次欠席率は高校在籍時欠席日数とも有意な相関を認めた. これは、間接的ではあるが、高校時の欠席日数が多い学生は入学後の欠席率も高くなり、その結果学修時間・効果が不十分となり、学修成績(GPA)が低くなる可能性が考えられる. その結果、留年もしくは退学となる学生が多くなるのではないかと考える. GPAと欠席率の関連については、先行研究でも報告されており [7, 8], 大学での成績向上のためには欠席率の改善が重要な要素になると考えられる. 中村・松田は授業理解の困難さや学校不適応感が高まるほど、欠席率が高まり、GPAも悪化するというプロセスを明らかにしている [7]. さらに、欠席率が高いほど学期GPAが悪化し退学リスクが高まるとされている [8]. 本学科内の教員の意見としては、欠席の多い学生は意欲低下、環境への不適応、コミュニケーションの問題が挙げられることが多

い. これらを踏まえると、退学、留年を防ぐためには、高校時の欠席、入学後の欠席が多くなる学生に対しては、授業参加や生活・学修指導を含めた教職員のサポートを可及的早期の段階から行っていくことが重要であると考えられる.

入試点数に関しては、全入試区分に共通する個別面接の点数を群間比較したが、有意な差は認められなかった. 大学卒業時の成績は、入学試験の成績よりも大学初年次の成績の方が強固に関連することも報告されている [9]. また、学修意欲を高められる環境を整備している大学とそうでない大学では、偏差値が同じでも退学率に差が生じることが示されている [10]. つまりは、学生個人的な努力として欠席率の改善、積極的な授業参加、科目成績の向上とともに、大学運営側としては学びやすい環境構築も退学率改善には重要な要素であると考えられる.

本研究の課題として、分析対象が限定されていることと各年度入学生の現状として3年間終了しているのは2017年度入学生のみであることが挙げられ、3年間での退学率や年次別の退学率の分析が不十分である. 退学率改善は本学科の重要課題であり、今後もさらなる検討が必要である. もちろん、その結果を踏まえ、大学全体、学科として最良の学生サポート、指導を行っていくことも必要である.

【結 論】

本学リハビリテーション学科における退学者の特徴として、入試区分別ではAO入試、公募推薦入試で退学率が高かった. 学籍異動の要因として、欠席数の増大、成績不良が抽出され、できるかぎり早期に教職員によるサポートを行う必要性が示唆された.

【文 献】

[1] 文部科学省ホームページ 平成26年度報道発表 学生の中途退学や休学等の状況について.

https://www.mext.go.jp/b_menu/

houdou/26/10/_icsFiles/afielddfile/2014/10/08/1352425_01.pdf

(2021年6月30日引用)

- [2] 日本中退予防研究所：中退白書 2010－高等教育機関からの中退－. NEWVERY, 東京, 2010, pp.12－84.
- [3] 藤井義久：大学生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討. 心理学研究, 1998 ; 68 : 441－448.
- [4] 田中存, 菅千索：大学生活不安に関する心理学からのアプローチ. 和歌山大学教育学部紀要 教育科科学, 2007 ; 57 : 15－22.
- [5] 山田ゆかり：大学新生における適応感の検討. 名古屋文理大学紀要, 2006 ; 6 : 29－36.
- [6] 朝日新聞×河合塾 共同調査 「ひらく日本の大学」 第11回 2014年度調査結果報告.
http://www.keinet.ne.jp/gl/14/09/hiraku_1409.pdf (2021年7月2日引用)
- [7] 中村真, 松田英子：大学への帰属意識が大学不適應に及ぼす影響 －出席率, GPAを用いた分析－. 江戸川大学紀要, 2015 ; 25 : 135－144.
- [8] 竹橋洋毅, 藤田敦, 他：退学者予測における GPA と欠席率の貢献度. 情報誌「大学評価と IR」, 2016 ; 5 : 28-35.
- [9] 浜田知久馬：アドミッション小委員会による学力追跡調査結果. 東京理科大学 教育開発センター FD 通信, 2012 ; 23 : 2－3.
- [10] 姉川恭子：大学の学習・生活環境と退学率の要因分析. 経済論究, 2014 ; 149 : 1－16.

